

第 20 回 「土浦市、最後の古墳」

3 世紀後半から 7 世紀代、古墳が造られた時代を古墳時代と呼んでいます。今回は古墳時代終末期、7 世紀後半に造られた古墳を紹介します。

古墳のイメージは、世界遺産に登録された大阪の百舌鳥(もず)・古市(ふるいち)古墳群にみられる前方後円墳のような大きな塚です。土浦市内でも、王塚古墳(手野町)、常名天神山古墳(常名)など、全長 80m を超える大きな古墳があります。

6 世紀後半になると古墳の数は増えますが、規模は小さくなり、土浦市周辺では全長 30m 以下の小さな古墳が多くなります。埋葬施設は、板状の石を組み合わせた石の棺(箱式石棺(はこしきせっかん))で、墳丘下の地下に造られるようになります。

7 世紀前半になると墳丘はかなり低くなり、形は円墳や、くびれの弱い前方後円墳形の古墳が多くなります。埋葬施設は地下に造られた箱式石棺です。

7 世紀後半、最終末では、古墳の形が方墳に変わります。墳丘は低く埋葬施設は地下ですが、横穴式石室を意識した石室となり、古墳の周りの溝(周溝(しゅうこう))から石室に通じる墓道をもちます。7 世紀前半の簡素化された古墳から、従来の古墳に近づけようとする意図が伺えます。埋葬された人の階層の変化なのかもしれません。副葬品では、静岡県西部、浜名湖周辺にある湖西(こさい)窯の壺などが出土します。このような古墳時代最終末の古墳は、東台古墳群(木田余東台)、石倉山古墳群(烏山)、北西原古墳群(常名)、寺家ノ後古墳群(永国台)などで発見されています。寺家ノ後古墳群から出土した須恵器から、8 世紀初頭まで造られていたことがわかりました。これらが土浦市で最後に造られた古墳と思われます。

さて、7 世紀を代表する市内の古墳として武者塚古墳があります。埋葬施設は箱式石棺と横穴式石室をあわせた構造で、石室の入り口部(前室)と遺体を埋葬する部屋(玄室(げんしつ))がありますが、墓道はありません。類例の少ない構造となっています。前室には、刀や銀製品などの金属製品が収められていました。重要文化財の武者塚古墳出土品は、12 月 8 日まで当館にて公開しています。ぜひご覧ください。



左)北西原 1 号墳(常名)

右)武者塚古墳(上坂田)